

# 名 刺 考



工学博士 大橋 秀雄  
日本機械学会会長  
(1992-93年)

プライベートの名刺には名前と住所だけというものもあるが、ビジネス用の名刺には必ず所属組織と役職、場合によって学位などの資格が記されている。名前、役職、資格。これが名刺の三要素であるが、それらをどう組み合わせるのか、それぞれに頭を使うところである。頂いた名刺の記述やデザインを眺めていると、その人の考え方やお国柄までいろいろと想像できて興味が尽きない。

筆者が関心を持つのは、名刺における資格の扱いである。その点で、イギリスと日本は両極端に位し、その中間にドイツなどのヨーロッパ諸国とアメリカが入る。

イギリス人の名刺を見るとすぐ気付くことであるが、名前の下に沢山の略号が並んでいる。イギリスの機械技術者の典型例は CEng BSc(Eng) MIMechE というところである。第一の CEng は Chartered Engineer の略で、英国技術評議会から公認技術者の資格を得ていることを示している。このためには、卒業後数年の実務経験を積んでから面接審査をパスする必要がある、響きとしては公認会計士と同じ重みがある。第二は学歴であり、大学の工学コースを終えて理学士の学位を得たことを示している。第三は、イギリス機械学会 IMechE から Member すなわち正会員資格を得ていることを示している。

以上の例のように、たくさん並んだ略号はそれぞれに職業資格、学位、学会資格などを示しているが、例えば学会資格が正会員の M からフェロウの F に変わるだけで、見る人に経歴の重みがストレートに伝わってくる。名刺に CBE や OBE を見つけたら、サーと呼ばれる一步手前の、ただならぬ勲功の持ち主と敬意を払うべきである。

ドイツでは、名刺に職業資格や学会資格を並べる習慣はないが、代わりに学位を法に則って正確に記述する。

技術者を下から並べると、Ingenieur, Diplom-Ing.(FH), Dipl.-Ing., Dr.-Ing.となるが、それぞれ職業専門学校卒、職業専門大学卒、伝統的の大学卒、そして工学博士となる。ドイツでは学位が即職業資格と認められており、このため技術者として必要な最小限の実地経験は、卒業条件の中に組み込まれることになる。

アメリカの事情は日本にきわめて近い。博士号 PhD は名刺に入れるとしても、学士や修士は MBA のような特殊な例を除けば記載しない。代わりによく目にするのがプロフェッショナルエンジニア PE の資格である。PE は州ごとに認定・登録されるが、CEng や最近増えつつあるヨーロッパ技術者 Eurlng と同様に、学歴と実務経歴を総合して審査のうえ認定される。

ひるがえって日本の状況を考えると、名刺とは所属と役職を示すものであり、資格称号については皆無のものが多く。学歴の誇示を避け、謙譲を美徳とする日本人の美意識、生涯一社単属のケースが大部分で、会社を越えたところで真価を発揮する個人の資格がほとんど役に立たないことなどが日本流の根源にある。

社会は、組織の中で個人が活動する事によって動いている。その枠組みの中で、個を重んずるか組織を重んずるかが問題であり、個を重んずる極限にイギリスが、組織を重んずる極限に日本が位している。名刺がそのことを端的に物語っている。

日本の社会にもじわじわと変化が浸透している。会社人間への疑問、高まりつつある雇用流動性、女性の社会進出、すべてがより個を重んずる方向を指している。この潮流が、やがて名刺にも反映されてくることだろう。

日本の技術者の活動範囲がグローバルに広がった今日、早速にも実行して頂きたいことがある。それは、少なくとも英文の名刺はイギリス風に仕立てることである。アフリカの片隅で仕事をするときを考えると、日本では著名な大会社の肩書きよりも、MJSME (日本機械学会正員) の一語の方がより客先の技術的信頼を得るのに役立つかも知れないのである。このときこそ、学会会員であることのメリットを実感して頂けることと思う。